学習院大学公開講座「源氏物語千年紀記念シンポジウム」を終えて

勝亦志織

二〇〇八年は『源氏物語』が歴史上に確認された年から数えて千年目にあたり、京都を中心として各地で「源氏物語千年紀」に関連したイベントが行なわれた。本学での「源氏物語千年紀記念シンポジウム」も、そうしたイベントの一環であったが、千年紀の最後を締めくくるようなシンポジウムだったのではないだろうか。特に、今回のシンポジウムでは魅力的な御講演を拝聴し、『源氏物語』と一口に言っても、単に文学として読むだけではなく、幅広い享受のあり方があることを改めて実感させられた。千人を越える来場者の方々も、そうした新しい『源氏物語』の魅力を感じられたのではないだろうか。

シンポジウムの基調講演は、佐野みどり本学文学部教授による「記憶の絵画―源氏物語と造形―　源氏物語のうちなる絵画」と、ゲストとしてお迎えした三田村雅子フェリス女学院大学教授による「源氏物語の木々―家の繁栄と衰亡―」であった。佐野先生の御講演は、『源氏物語』内部に見られる絵画にまつわる表現から、実際の『源氏物語』の絵画化まで、『源氏物語』というテクストを発端にして、どのようにして物語が絵画化されるのかについてのお話であった。物語の本文が絵画の内容を規定する様相や、絵画の定型化と記憶の問題、絵画と本文の重なりが新たな絵

画の創出につながったことなど、物語と絵画の関係性の深さをお話しいただいた。

一方、三田村雅子先生の御講演は、『源氏物語』に描かれた木々について、「蔭」や「根」といったキーワードから読み解かれた。物語が物語内の過去を引用し、その引用された過去の時間が繰り返し「蔭」と表現されること、その「蔭」＝権力の庇護を失った宇治十帖の世界においては、木の根元に拠り所を求めること、特に物語最後のヒロインである浮舟と「根」のかかわりなど、物語全体にわたるお話であった。特に、『源氏物語』に先行する『うつほ物語』が大木の根元の「うつほ」＝空洞にはじまり、神話的な巨木のイメージを利用していたのに対し、『源氏物語』は存在の根拠である「根」にこだわり続けるという対比を指摘されたことは非常に興味深いものであった。

私個人の感想になってしまうが、お二人のお話はいずれも興味深く、『源氏物語』の多様な享受のあり方が示されたものだと感じた。お話しされた内容はそれぞれ違うものであったが、共通して問題とされていたのは、物語内や絵画内の事柄のもつイメージの問題である。絵画化され、人々の記憶に残り、その記憶の想起から典型化されるイメージ。一方、物語内に引用され繰り返されることにより固定化あるいはパターン化するイメージ。そして、いずれのイメージも変遷し新たなイメージにつながる。

例えば、絵画に描かれた「桜」。桜が咲いていることによって季節は春と理解され、「桜」の持つイメージが画面を規定する。そして、その絵画の型が典型化されることにより、描かれた「桜」のイメージもまた典型化し、固定化することになる。それは物語内でも同様である。物語内には植物の比喩構造が多く見られ、例えば桜といえば紫の上というような固定化がみられる。しかし、それは女三宮の登場により変化し、桜は女三宮を象徴することにもなる。このようなイメージの固定化とその変遷は物語でも絵画でも重要であることが、今回のシンポジウムによって再確認されたのではないだろうか。

さて、お二人の御講演を伺って、私が思い起こしたことは多くある。例えば、『源氏物語』を絵画化したもので最も有名であろう国宝源氏物語絵巻には、竹河巻の絵がある。竹河巻には二枚の絵が残っているがそのうちの一枚である竹河（二）では、玉鬘の娘二人が桜を賭け物にして碁を打つ場面が絵画化されている。賭けの対象となった桜が画面の中心に配置され、女房たちが周囲を囲み、大君に思いを寄せる蔵人少将が垣間見しようとしている姿が描かれているが、問題としたいのはその桜の存在感の大きさである。

正しく「花の蔭」とも呼べそうな桜であるが、そもそも桜が賭けの対象となったのも、桜の所有者をめぐって姫君たちの父と母（玉鬘）の見解が相違していたからであった。桜は庇護者たるべき人々の象徴であり、庇護してくれる人物を争うかのように姉妹は桜をめぐって争うこととなる。しかし、桜の花びらがすでに散り始めていることが象徴するように、庇護者たる父は既に故人であった。まるで、その隙間を縫って新しい庇護者となるべく蔵人少将が登場しているかのようでもあるが、彼の存在は右下に押し込められている。「花の蔭」はすでに散り始めているのであり、それを証明するように物語は玉鬘の娘二人をそれぞれ冷泉院、今上帝に入内させるもその結果は悪い方向に向かってしまうのである。竹河（二）への考察はすでに多く成されており、ここで私が述べたことは単なる思い付きに過ぎない。しかし、絵画と物語のそれぞれの持つイメージを重ねてみると、また違った解釈の側面が見えるのではないだろうか。

また、一方で樹木という点に注目してみると、特に藤原氏の男性に樹木の名称が呼称として与えられていることに気付く。頭中将は光源氏と比べられて「花のかたはらの深山木」であったし、その息子はそれぞれ「柏木」「紅梅」である。また、頭中将の娘である玉鬘は一貫して「根」を求める存在であった。光源氏と夕霧が「光」「霧」と、目には見えても確固たる何かをつかむことができないが空間を占める存在であるものを名称に与えられていることと比

べると、確固たる「根」を持ち、「葉」や「梢」を広げる樹木のイメージが左大臣家の血統に与えられているようにも考えられる。もちろん、こちらもシンポジウムを拝聴しての思いつきに過ぎず、何か論に発展するものではない。しかし、『源氏物語』の中に描かれた木々の表象は絵画との関わりはもちろんのこと、様々な問題をはらみ、今後展開される必要があると思われる。

さて、ここまでシンポジウムの内容を私なりに概括してきた。私の感想めいた部分が多くなってしまったが、私にとってこのシンポジウムに参加できたことは非常に貴重な体験であり、多くのことを学ぶことができた。また、図らずも、シンポジウムの開会の辞が学習院女子大学学長の永井和子先生、そして司会を私が担当し、今回のシンポジウムは女性ばかりのシンポジウムであった。このことは、シンポジウムの後に様々な方からご指摘いただいたが、平安時代の女性が執筆した物語を、現代の女性がどのように享受するのか、このシンポジウムでその一端が垣間見られたのではないだろうか。

最後に、ご講演いただいたお二人の先生方をはじめとして、シンポジウムを計画・運営してくださった史料館のスタッフの皆様に御礼申し上げる。シンポジウムについての企画・進行を任されたものの、私の拙さに先生方は無論、スタッフの方々にも多大な迷惑をおかけした。このシンポジウムが成功したのは、何よりもスタッフの皆さんの尽力の賜物である。

さて、シンポジウムとは話が少しずれるが、このシンポジウムに合わせ「一夜限りの源氏ものがたり」と題し、記念展覧会も開催された。学習院大学史料館及び文学部日本語日本文学科の所蔵する史資料のうち、約三十点余りが展示されたが、この展覧会にも私は関わらせていただいた。日本語日本文学科所蔵の古典籍のうち『源氏物語』に関係するものを中心に、厳選したものを展示させていただいた。本学が所蔵している貴重な史資料を公開するとても良い

機会であったと思う。こちらも多くの方々にご来場いただき、『源氏物語』の偉大さを見せつけられたようであった。なお、この展示には、展示解説の作成に日本語日本文学科の在学生の方や卒業生の方にご協力いただいた。特に、神田龍身教授のゼミの皆さんには展示物の選択から実際の展示作業までお手伝いいただいた。ご協力いただいた皆様にこの場をお借りして御礼申し上げる。